

M f o r M a s q u e r a d e

トラック5 歪んだ憧憬

(SE：扉開ける)

(SE：扉閉まる)

(SE：足音)

咲 「あ、先輩。もう来てたんですね。

約束の時間まで随分残ってるのに……ふふ。

そんなに楽しみにしてたんですか？私達の密会……。

それとも……。」

咲 「私に弄られるのが待ち遠しかったんですか……？」

咲 「ふふ。先輩の反応には飽きないなあ。

つい意地悪したくなります。

まあ、戯れはここまでにして……。

そろそろ溜まってないんですか？性欲。

ふふ。顔を赤くしちゃって。良いんですよ？

年頃の男の子なんですもの。仕方の無いことなんです。仕方の無い……。

最初から言ってますが、先輩の性欲管理は私の役割です。

仕事に障らないように、確実に絞り出してあげますよ。

あ、今日はちょっと違うのかな。正確には、私じゃないんです。

理解に苦しむ顔ですね。ふふ。

前に言いましたよね？私の秘密を教えるって。

今日にしましょう。

ちゃんと見ててください、先輩。

人に見せるのは、初めてですから。」

(SE：咲、姿を変える)

咲

「どうです？先輩。

いや、この姿では違和感があるな。言い方も変えた方が良さそう。

外見だけでは、私の方が年上になるから……。

君、にしよう。ふふ。

どう？この姿。胸も大きくなったし、お尻だってムチムチになったんだ。

触りたくなるでしょう？

状況が理解出来てないようだね。ふふ。まあ、無理もないっか。」

(SE：周りを歩く)

咲

「カウンセリングでは隠しておいた事実が幾つかあるんでね。

これがその一つ。

スカーレット・ウィッチーズ。彼女達に監禁された際、本当は身体改造の手術を受けていてね。

そのテクノロジーによって、このように成長した姿になれるようになったんだ。

勿論、それにも限界があって、長くは維持出来ないけど……。

私の願望を叶えるには充分だから、別に良い。

ふふ。驚いた？私にこんな能力が宿ったのこと。

それとも、彼女達に身を委ねたこと、なのかな？

世界って面白いよね。思い出してご覧なさい。自分の身に起きたことを。

親しい後輩にしか思っていなかった女の子が、最近になっていきなり自分を支配した挙げ句、今になってはこんなエロい体のお姉さんになって見下しているのよ？ふふ。

あら。複雑な顔をしてるね。どうしたら良いか、迷っている……。

迷うことは無いのよ？それより……。」

咲

「折角得た私の新しい体……。

試してみたくない……？

この体なら、色んなことが出来るのよ？

熟れた果実のようなこの体なら、君の望む全てのファンタジーに答えられるわ。

想像してみて。このお胸で何が出来るかを。

お尻だって大きくなってね。敷かれないとは思わない？

きっと気持ち良いんだろうさ。分からないけど。

想像の中にしか存在しなかった、理想のお姉さんとの甘い一時。」

咲 「ふふ。もう顔がとろけてる。そう。それで良いのよ。

いつものように、私に体を委ねなさい。

楽しみはこれからよ。

ではまず、こっちから頂こうかしら。」

(キス)

咲 「あら。キスしただけなのに、目がとろんと。

徹底的に絞り出したつもりなのに、未だ快楽に弱い。

上司としても、男としても。笑っちゃうわ。ふふ。

ほら、しっかりしなさい。楽しみはこれからよ。」

(SE：脱衣)

咲 「ふふ。もう我慢汁で塗れてる。

やっぱり、お姉さんからのキスは、刺激強すぎたかしら。

初めからこうなんじゃ、果たして、最後まで行けるのかな。

じゃあ、私も……。」

(SE：脱衣)

咲 「嫌らしい〜。待ち焦がれていたかのように目を大きくしちゃって。

そんなに気になるのかしら。ふふ。

さあ、先から見つめていた、お胸よ。

元の姿でも小さい方ではなかったけど、こっちの方が良いでしょう？

片手では握り切れない程の大きさに、力を入れるまま受け入れる柔らかさ。

触るだけで幸せ過ぎて気絶しちゃうかも……。

まあ、あくまで触れるなら、の話だけど……ふふ。

その手で私に触れるなんて、十年早いわ。

大人しく私の手の中で弄ばれなさい。

それだけで、身に余るわよ。」

(胸で性器を包み込む) (SE: 肌に触る音)

咲 「あら、おちんちんが消えちゃったわ。

ちっぽけで、最初から我慢汁垂れてたダメなおちんちんはどこなんだろう？

どうせ、女一人満足させない程度のおちんちん。この際、無くしたって良いでしょう？ どう思う？」

(SE: パイズリ: 普通の速さ)

咲 「うん？ 体が震えているな。

具合でも悪いのかしら。

私？ 私はただ、お胸を揉んでいるだけなのよ……？ ふふ。

もみ、もみ。

もみ、もみ。

ここまで大きいと、何と言うか……。

面積が広くて、疲れちゃうわ。

力を入れすぎると痛いから、円を描くように優しく……。

ふふ。何。私の動きに合わせて、声を出しちゃって。

君に何かをしている訳でもないのになあ。気持ち良いことでもあるのかな？

まさか、お胸を見ただけで興奮しちゃった？

全く、救いようも無い変態ね。

そんなにお胸が好きなら、存分に見てなさい。

もみ、もみ。

もみ、もみ。

力を入れて、上下に……。

もみ、もみ。

もみ、もみ。

力を交差して、上下に擦れるように……。

もみ、もみ。

もみ、もみ。

うん？お胸の間に何かあるようだね。

小さくて良く見えないけど……。

何だろうね。ねえ。君はどう思う？

あら、もうとろけた顔しちゃって。

そんなに私のお胸が気に入ったかしら。

見るだけで感じるとは、みつともない。

ふうん。何だろうね。いつぞ潰しちやおつか。

えいつ、えいつ。

へえ、予想外に堅い。

もっと力入れてみよつか。」

(SE：パイズリ：早く)

咲 「ふうん、どうしても潰れないなあ。

意外にしぶとい。

うん？ふふふ。君、何してるのかしら。

目の前で腰を回しちゃって。

先から動いているのよ？知らなかった？本当、みつともない。

気持ち悪いから止めて貰える？

今、お胸の間に挟み込まれたものを潰しているから、大人しくしてなさい。

君なんかに構う時間など、無いわよ。

では続けて……。

えいつ、えいつ。

何か零れだしてきたようだけど。そろそろ潰れるのかな。

良し、この勢いで。えいつ、えいつ。

壊れてしまえ〜。潰れてしまえ〜。」

(SE：射精)

咲 「あら、お胸に温い液体が……。

壊れきったのかな？ どれどれ。

ああ。ふふふ。何よ。ちっぽけで女一人満足させない早漏のダメちんちんじゃない。

見えないと思ったら、お胸に挟まれていたわ。

流石は君のおちんちんだね。お胸が好きみたい。ふふふ。

見付けて良かったね。こんなおちんちんでも、男の象徴なんだから。

さて、見付け出してあげた私へのお礼は？

さあ、言いなさい。

『お姉さん、ありがとう。ちっぽけで早漏の僕のおちんちんを見付け出してくれて。』

ふふふ。恥ずかしくないのかしら。

男としてのプライドなんか、これっぽっちも無いみたい。

おっと、いけない。休ませないわよ？

普段ならこの辺で終わりだけど、今日は違う。

重要な話もあるし。

そろそろ、君に首輪をつけなくちゃ。

ふふ。どうやらおちんちんもその気になってるみたい。」

(男性器を太ももに挟む) (SE：肌に触る音)

咲 「どう？ おちんちんが太ももに挟まれた感触は？

お胸とはまた別格でしょう？

柔らかくてプリプリした感触。

ふふ。ヨダレ垂らしているわよ。

口もつぐめない程乱れるなんて……全く向上心なんて無いわね。

挟まれただけでこれとは……。

本番はこれからなのね。」

(SE：素股：普通の早さ)

咲 「太ももでおちんちんを撫でられる気分はどう？

両足のぷりぷりした肉に挟まれて締められる圧迫感。

まるで、本物のセックスでしょう？

ある程度は、本当よ。気付いてるでしょう？

太もも以外にも感じられる、気持ち良さ。

そう、パンツの感触よ。

当然よね。太ももの上は、あそこだもの。

女性にとって、最も大切なところ。また、一番気持ち良くなる場所。

お・ま・ん・こ。

ことの大事さが分かった？

薄い布一枚を挟んで、私のおまんこが君のおちんちんに触れてるのよ？

私のあそこと、君のダメちんちんが擦れ合ってるわ。

ふふ。嬉しい？ 幸せ？ 感激かな？

そうよね。君なんかにここまでしてくれた女なんて、無かった筈。」

咲 「そう言えば、結構時間が経ってるなあ……。

あの時の告白の答え。まだ聞いてないわよ。

ふふふ。滑稽だわ。

快楽に陥られて、あほ面になって、恋人になってくださいだなんて……。

告白にしちゃ最低だわ。今の言葉、どの女性にだって断れるわよ？

勿論、私にも。

ああ、そんな悲しい顔しないで。

だって、そうでしょう？

私と君の関係は、あの時とは違う。

同位の恋人関係になんて、今更なれると思う？

現実を見なさい。

前にも言ったよね。君の立場は、オモチャ。或いは、奴隷に過ぎない。

そう思わない？ふふ。そう。理解が早いわね。

なら、もう一度言ってごらん？今の立場を踏まえて。」

咲 「ふふふ。そう。そうでなくちゃ。

ダメな自分を認めた上で自らを屈めた、醜く悲惨な告白。

ちゃんと聞き取った。見事だったわ。こっちの胸までゾクゾクする程。

その通り。君は私の捕虜なのよ。

いつでも弄べるオモチャであり、私の気分次第に扱える奴隷であり、

私の為に命も落とせる隷(しもべ)。それが君なのよ。

体が蠢いている。まるで痙攣でもしているようだわ。

自分の立場が動物以下になってるのに興奮するだなんて。

全く、変態マゾは度し難いな。

だって、それが気持ち良いんでしょう？ふふ。」

咲 「ところで、私の為に働くのが何を意味しているかは分かってる？

まあ、気持ち良さに頭をやられて、分からないのかしら。

じゃあ、特別にお姉さんが教えてあげる。

私の為に働くのはね。」

咲 「スカーレット・ウィッチーズの為に働くことなのよ。

つまり、裏切ること。

だって、私はもうスカーレット・ウィッチーズの幹部としてここにいるのよ？」

咲 「ふふふ。その表情。見物だわ。

表面上、抵抗すべきなのに、抗えない気持ち良さで心と体が別になってる。

これじゃ、壊れたお人形だね。ふふ。

さて、私に抗い切れるのかな？

もう私からの快楽に陥られて、私無しでは生きていけない君に。

無理よ。女体に無防備な君には、到底。

まさか、耐え切れると思ってる？

ふふ。面白いことを言うじゃない。

君なんか、私の気分次第では……。」

(SE：素股：早く)

咲 「ほら、どうかな？大口叩いておいて、結局は？

表情が全て語ってるわよ。

打ち上げてから十秒も経ってないのに、目が振るえてる。

それに、顎を伝うヨダレ。

分かった？

無意味な抵抗は止めて、受け入れるのよ。

カウンセリングの初日。絞れ出されたあの瞬間から全ては決まっていた。

快楽を注ぎ込んで、君の心を毒した。

性欲処理を名目に、私好みの糸を繋いだ。

気付かないまま、性欲に目が眩み、快楽を求めるようになった君は、

私の思うまま動くようになりつつあったのよ。

残酷と思う？

怖い？

違うね。そうではない。

禁忌を犯す背徳感。

その気持ち良さを知ってしまったからには、

これもまた、自分の性欲を満たす、一つの出来事に過ぎない。

そう。気持ち良さの為なら組織をも裏切られる程、クズに成り下がったんだ。

ふふ。悲しむことは無い。空虚なその心は、私が快楽で満たしてあげるから。」

(キス)

(SE：射精)

咲 「まあ、威勢の良いこと。

これまでで一番多い量かしら。

それ程、気持ち良かったんでしょう？

体は正直よ。

うん？ああ、流石に連続射精は懲りるのかな。

さあ、疲れただろう？お姉さんのお胸に顔を埋めて良いわよ？

優しく抱いてあげる。

そう、良い子だわ。

何も心配しなくて良いわ。

お姉さんは、君だけのものだから。ふふふ……。」